

篤志のある一日

平井和貴子



暮もおし迫った小春日よりの朝、近所の保育園から電話がありました。「今日はお餅つきですが、先生はご診察でお忙しいでしょうね。一日、ついでにいただきたいのですが……。あっちゃんもぜひいらして下さい」。

日ごろ、篤志の身体と生活に理解をお持ちの園長先生から親しいお誘いの言葉に、大喜びでさっそく篤志に靴をはかせて……これも大仕事…… 出かけて行きました。いつもは門前で「ここはあっちゃんの幼稚園ではないのよ」と言い含められて、門のさくをかたかたゆすぶりながら中のお友だちが遊び回るのが眺めていたのに、今日だけは許されて中に入れたことをどう受けとめたのか、手をぐいぐいと引っ張って前のめりに広場の真中にすえられた臼の方へ進む右手の力の強いこと！そこではもうお手伝いの父兄の手で、あらかたつき上がったまっ白のお餅を、今度は小さな杵で園児たちが代りばんこにベッタンベッタン。ここの運動場は土でしたが、その柔らかい土の上にかまどをしつらえ、古びた釜のふたから湯気がふきこぼれているのをみた時、なつかしさとうれしさ、そして皆さんの善意が胸に迫って、煙が目にしみました。

元気な園児にまじって、篤志も片手で杵を持ち上げ、萎え

た左手は私がささえて、皆と同じにベッタンベッタン。きき腕の右手だけは人一倍力強く、大工さんのように節くれだっています。何回も一生懸命持ち上げて、やる気十分。次の友だちがまちかねているのに、取り上げるのに一苦労でした。

お手伝いのおばさんの掛け声、「ホラよ」「ベッタンコ」「よいしょ」「ベッタンコ」のリズムにはすっかり魅入って、思わず「ウフ、ウフ」と声を出して、体中で笑っています。

「あっちゃんも一緒にどうぞ」とつき上がったお餅が、おぞう煮とあんころもち、そしてきな粉とからみになって出されました。一人前をお盆にのせて下さった時は、一瞬とまどって、なかなかじっと食事を続けるのは大変で、うまく食べさせられるかと心配になりました。最近ずっと風邪気味ですっかり食欲をなくし、午前中は一口も物をいただかない今日このごろ、ましてお餅はまだ食べさせたことがないというすべては全く杞憂でした。おぞう煮はペロリ、甘い物は好きでないので、きな粉まで、本当に何日ぶりかでみる食欲でした。

さて、各自さっさとすませて、よごれた食器はちゃんと部屋すみに片付けた同じ年ごろの子どもたちにとって、親にかかえられるようにして一口一口、手まで添えられ食べさせられている。半身マヒの子どもの食事は、何と珍しい光景で

したでしょう。ソロソロ周りに集まった子どもたちの質疑応答が始まりました。「この子どうしたの?」「病氣?」「左手ずっとなおらないの?」

そして「平井先生にみてもらったら?」には思わず苦笑。

平井先生、もってめいすべし!

バツと近くに顔をよせてきた子の髪を引っ張ったり、ぐつと足でけてみたり、言葉の出ない篤志にとって、それが仲間入りのごあいさつ。「イテエナア」さすがの番長Y君も、他意のないのがわかるのか、説明いらずで引きさがる。すみでひじつき合わせてのケンカ組も、篤志が「ヤレヤレエ」とばかりの掛け声でいざって中に入っていくと恥ずかしそうにザエンド。篤志にとっては大好きなボクシングのテレビ実演とばかりに張り切ったのに……。

クラスのマスコットの小鳥をみせてくれる子。みかんを半分むいてくれる子。でも何と簡単に仲間入りさせてくれたことでしよう。しかしこれはあくまでお客様扱いで、仲間として共同生活をしていく場合は、もっと問題はいろいろ起こってくるのでしよう。

中に一人、篤志の養^たえた左手も、引きずって歩く左足にも何の関心も示さず、ぎゅっと引^ひつ張られても平然として付き

合ってくれた女の子、それは篤志と施設でお友だちの「まあちゃん」の妹さんでした。小さい時から兄を見慣れていること、そして生活を共にするうちに自然にはぐくまれた理解と思いやりが、幼い彼女の身についたのでしょうか。こんな彼女たちが成長した時代なら、当然の権利として、普通児と同じように、法律に守られながら社会全体の理解と愛情に恵まれた生活を送れるのではないのでしょうか。

看護婦さん、園長先生たちに暖かく見守られながらお別れした門前で、すれちがったお友だちの一人が、お迎えの母親に「ねエママあの子どうして……」と何か報告しているようです。どうぞ、いい機会なのですからうまく話を発展させてほしいと願いながら、篤志の手を握りしめて道角を曲がりました。

平井篤志ちゃん。昭和四十二年十二月二十九日生まれ、出生後間もなく髄膜炎をわずらい、その後遺症で左上下肢麻痺の状態で現在六歳になりました。小児科医を父にちながら、その昭和四十二年という年は流感のはやった時でもあって、開業医は非常に忙しく、皮肉な結果になってしまいました。

今日まで、板橋整肢養護園で治療をうけながら、両親、二人の兄、祖母、そして理解のある人々に見守られて成長し、考えようによっては恵まれたケースといえるかもしれません。

今度、豊島区で「区立千川子どもの家」という身障児施設が開設され、現在では、一週間に二、三日そこへ通って集団生活を経験しています。

(編集部)

